

すなわち、それが成熟しえなかった点に問題がある。

さらに堀江氏が「小商品生産」段階の農民層分解の最終形態を新潟と泉州の例に求めているながら、二つのタイプの示している意味を検討していない。堀江氏の所論をより展開すれば、前者は貧窮分解論にもとずくものであり、また、後者は両極分解論の所産とみているはずである。しかも、後者の意義を堀江氏は極力山田舜氏の理論に近い考え方で抑制しようとしている処に特徴がある。

しかし、日本における地主制の成立過程を確立期に大地主の存在しているという事実があっても、貧窮分解論だけで説明しようとすることは困難ではないかと考える。すなわち、幕藩領主的封建的土地所有が解体させられていくのではないならば、貧窮分解によってもたらされるものは、多量の手余り地の発生か、または、経済外強制の強い農奴制への強制還元かに帰結するはずである。

日本における地主制の形成過程を説明するためには、両極分解論を媒介にしなが、貧窮分解論に帰結する意義を考えなければなるまい。

割当てられた枚数を超過したのでこの辺で終ることにする。

(A5判三二五頁 昭和三八年二月 岩波書店発行 定価九百円)

(一九六三・六・一五稿)

(東京教育大学助教授)

野間三郎著

地理学のあゆみ

近代地理学の潮流

——形態学から生態学へ——

松田信

一

「地理学とは何か」という問いに答えるにはまずその歴史を以てするのがよいとはしばしば言われるところである。とくに輸入された地理学がようやく根をおろして独自の発展をはじめようとしている日本の場合、これはとくに必要であって、勝れた研究を原典について正確に歴史的に理解しておかないと多くの誤解や逸脱を生じ易い。地理学史の専門的研究書があいついで出現していることは、この意味で誠に喜ばしいことである。それは地理学の研究分野が拡大充実されるということだけに止らず、諸研究を内面的に高める上にも有益だからである。

地理学史ないしは地理学本質論を記述する場合には大体つぎの三つのタイプがあると思う。

- (1) 学史的事実を正確に記述することに努めるもの。
- (2) 学史上の問題点を中心に論究しようとするもの。
- (3) 一定の地理学観を展開するために過去の諸地理観に省察を加えるもの。

これらはそれぞれ性格を異にするが、視点の置きどころによって

生ずる差であつて、同一著者のものでも異なるタイプのものが生れ、また中間的なタイプの作品もあり得る。

二

ここにとりあげる二著は（以下「あゆみ」「潮流」と略称させていた）ともに従来単行本としてはほとんど全く見られなかった地理学史の専門書であり、待望久しかったものである。「あゆみ」は簡略に圧縮記述してはあるが、古代から一九四五年までを含み東洋と西洋を関連させて扱った独創的で斬新な高度な意図を盛り込んだ地理学通史である。上述のタイプでは(1)に近いといえようか。一般的な読者を目標に近付きやすくなるための配慮が行きとどいてゐる。「潮流」は副題が示しているように、「生態地理学」をととめる著者が、地理学における生態学的考察法の展開を歴史的に検討した研究書である。上述のタイプ(2)に属するといえようか。読者になり高度の予備知識を要求し、地理学について深く考察を進めようとするほどの専門的読者を想定して書かれている。同じ著者の手で書かれた両書はそれぞれ特徴をもちつつ、ある面ではたがいに補いあつて地理学の正確で深い認識を提供し、地理学の方法を根底から考え直させてくれる。両書を同時にとりあげるのはこうした理由からである。

著者の基本的立場の要点は、地理学史は科学史の一翼をにない方法論にとって代り得るものでなければならないこと、近代地理学史を生態学的思想方法の展開過程と見ること、の二点に帰着するであらう。まず「あゆみ」において著者は、地理学そのものの性質から

して、地理学史は「さまざまな知識や体験の集積」（「あゆみ」二頁）であつて、各種の学問や政治的社会的事件と直接間接にかかわりあつてゐるといふ。そこで「地理学がどのように、そうしていかなる時代に、結局それは何のために、どう変化し、どこに進むのだろうか」（「あゆみ」二頁）ということを中心にして、「世界および日本の関連」や「社会事象・科学一般の動きとの関連」の中で地理学の発展を「わかりやすくおもしろく」（「あゆみ」一六三・四頁）記述する。その結果地理学の諸分野にわたる広い認識と、文化全体の中での地理学の動向に対する見通しとが与えられる。「潮流」においては、地理学史における「個別的な問題の研究」（「潮流」一頁）に主眼をおいて「一九世紀から二〇世紀にかけての科学としての地理学の歴史」（二頁）を追求する。その際視点は「人文地理学が植物地理学の方法と密接な関係を有すること、あるいはそれが人文地理学に於ける生態学的研究法となつて展開する経緯の解明」（二頁）というところにおかれてゐる。つまり地理学に本来内在していた生態学的なものの展開として一九世紀の地理学史を明かにするのが「潮流」の目標である。著者によれば地理学における「生態学的」なものは、現在少くも二つのおもな傾向を含む。一つは純粹の生態学ともいふべきもので環境の研究・環境要素の分析に努める。現代ではホワイトやレンナーの立場がその例である。もう一つは「地域の諸現象、特にその特質的なものの機能的関連を把握しようとする態度」（二〇二頁）であつて、生理・機能の追求を主とするもので、トルルの立場がよい例である。これはいいかえれば「生態学を一つの観察方向」（二〇〇頁）と考えるわけで、著者はこれをリッター

以来地理学に伝統的に内在し發展して来た本流とみなしている。生態学という、生物学的方法を人間に適用することは危険ではあるが、「人間社会に対する仮説を与えるもの、実験を可能にする地盤を用意するもの」として是認されてよいのではないかと言う（二一八頁）。それは研究法・調査法として生態学を利用するというのではなく、「高次の方法」（二〇三頁）として、「観察法」として地理学の本質を明かにするものとして消化し利用することなのである。以上のように地理学史をとらえ、生態学を理解する著者は、どのように地理学史を叙述しているであろうか。

三

まず「あゆみ」においては古代（Ⅰ）、ギリシア時代（Ⅱ）、ヘレニズム・ローマ時代（Ⅲ）、中世（Ⅳ）、ルネサンス（Ⅴ）、一七世紀（Ⅵ）、一八世紀（Ⅶ）、一九世紀（Ⅷ）、二〇世紀（Ⅸ）と章を分け、西洋地理学の發展を概観しつつ、それに関連させて、ところどころで東洋ないし日本における事情を挿入する。「ゲオグラフィア」という言葉が古来「科学的に構成された地理的認識」と「諸地方にある事実についての知見」の両方を指すことの意味深さを指摘して中世までの地理学の歴史を顧る。ルネサンスは「科学革命の時代」として航海と地図学の發達が著しく、この傾向は一七世紀まで続く。一八世紀には新しい変化があらわれ、自然科学が著しく發達し、それとともに旅行探検の結果も科学的な知識として整理されるようになる。こうして一九世紀になってフンボルトやリッターなどの出現で近代地理学が確立され地理学内の諸分野の研究が分化しは

じめる。二〇世紀はこの分化發展の時期なのである。

「あゆみ」を独創的なものにして第一の特色は、これだけの小冊の中に驚くほどの内容を入れた地理学通史だという点である。第二に広く經濟・社会・文化・技術・思想などの諸現象との関連の中で地理学の發達を論じている点をあげねばならない。各章末に挿入されている年表は、とくに著者の苦心されたところであろうし、軽く見過すことの出来ない大きな意味をもち、多くのことを暗示している。最後に一般向けの姿をかりながら、実は著者は本書において地理学史全体を描きあげる大きな構想を組み立て独自の見解を多く盛り込んでいることに注意しなければならない。例えば近代地理学の歴史を(1)一八六〇—九〇(一九〇〇)年、(2)一九〇〇—三九(一四五)年、(3)一九四六年以降、の三期に区分する試案を示している(一二七頁)。これは現代地理学を理解する上で非常に注目すべき試みであろう。要するに「あゆみ」は研究者に多くの示唆を与えるほどの内容をもった教養の書として、地理学に対する一般の認識を高めるのに役立つと思われる。

四

近代地理学史の問題は「あゆみ」のわくの中では十分に説明しつくされなかったのは当然である。「潮流」の内容は、扱われている代表的地理学者に即していえば大体つぎのように分けられる。一八世紀の諸学者（Ⅰ）、フンボルト（Ⅱ—Ⅳ）、リッター（Ⅴ—Ⅷ）、ベッセル（Ⅸ・Ⅹ）、リヒトホーフエンとマルテ（Ⅺ—ⅩⅣ）、生態学的方法の發展（ⅩⅤ・ⅩⅥ）。実際には必要に応じて論述が展開

されているので、以上の区分は必ずしも著者の意図を反映しないところもあろう。

著者によれば近代科学としての地理学はリッター以後形態学的方法を媒介にして展開したのであり、フンボルト以来の生態学的方法も次第に成長して今日重要性が明らかに成つて来つた。この二つの研究法の系譜を明らかにし、両者の關係を探索して「生態学的方法の展開としての地理学史的研究」(一九九頁)を推進すること、これが本書を一貫して流れる著者の考え方である。もちろんここでいう「方法」とはすでに注意した通り研究の手段、手順などではなく、「一つの科学の性質を規定する」「高次の方法」(二〇二・三頁)である。

フンボルトは「生態学的思想の淵源」(五四頁)であり、多くの方法や概念を萌芽の形で含んでいて、地理学に思想を提供したのである。リッターは地理学に組織を与えた。「地表」を「地理的個体」概念によつて体系的にとらえ、それを「比較」法を用いて類型学・形態学に組織した。ベッセルは地図を「比較」することによつて問題を掘り下げ、リッターの「形態学」を地形学の方に狭く限定しながらも科学的に高めた。リヒトホーフンは「コログラフィ」(地誌)として地理学の方を確立する。これはフンボルト・リッター以来の伝統を正しく継ぐものであった。しかしかれの思想の成立にはマルテの果たした役割が大きかった。マルテはリヒトホーフンに先立って科学的考察法を形態学・生理学・地域学(コロロギー)の三方向に分けてとらえる。この地域学が実は広義における生態学であった(一六九頁)。リヒトホーフンはマルテのこの三分

法を少し修正して形態学・地域学・発生学(これが地理学に本来的な生態学を代表している)に三分して地理学の方法を論ずる。リヒトホーフンは実績では地表の形態学としての地形学を發展させるのであつて、明確に地理学に本来的な生態学をとり出して人類にそれを適用するのはラッセルであつた。二〇世紀にはかかる生態学的なものが体系的に分化發展をとげていく。著者に従つて地理学における生物学的思考法ないしは生態学的思想の展開のあとをたどると大体以上の様になるであらう。もちろんこのほか地理学の基本的な諸問題に数多く論及されており、本書の内容を正確に要約することとはほとんど不可能である。

こうして「潮流」は地理学における生態学的思想の展開を詳細に論証しているのである。その論証の方法はきわめて厳密で批判的である。そこにはヘットナーやハーツホーンの方法を思わせるものがある。四〇〇点に近い方法論的な論文その他を駆使して、直接原典に当ることに努め厳正に批判検討を加えている。例の少ないほど着実に確実な研究手順を感じとられる。こうして地理学史の諸問題の批判的歴史的研究の規準を示した点が本書の最も注目すべき成果の一つであらう。これに関連して地理学の基本的諸概念、例えば比較・景觀・類型・地域・生活型・方法・地誌その他について読者は思いちがいやあいまいさに気付き訂正せざるを得なくなる点をいくつか見出すであらう。そしてそれらの本質や本来の意義を明確にする必要のあることを改めて痛感するであらう。本書はこうして地理学の基本的研究法に大きな前進をもたらす。

厳密な批判的地理学史の研究結果は、近代地理学に新しい照明を

与え、扱われた多くの学者や研究の新しい側面や問題点を照らし出すことになっている。フンボルトの植物地理学、リッターの「地理的個体」や歴史地理学・形態学、マルテ・リヒトホーフェンの三分法やコロギーなどの諸問題がそれである。特に地理学の研究法を、生物学に対応するシステムによって系統立てた人としてマルテに大きな学史的意義を与えていることは著者の発見であろう。こうして生物学的方法・生態学的思想の系譜を明かにしたことは今後の地理学的发展方向を展望する上で極めて大きな意味をもっている。それは二〇世紀後半以後どんな名称が用いられようと、ともかく地理学は人類社会の内的構造の研究を精密化する方向に進展するであろうし、それが生物社会の研究とながしか平行的なものをもちつてあらうと考えられるからである。

「潮流」は「科学史としての地理学史」の画期的な業績のひとつであって、近代地理学史の書であると同時に方法論の書でもある。本書は今後研究者にとってある種の灯台の如き役割を果たすであろう。

五

「潮流」はたとい専門家でもはじめての読者にとってはかなり難解な点をもっている。それは一つには著者が専門家の読者を想定しており、諸文献への通曉と博識を背景にしている、それらの読者でも容易に著者の思索に追隨し得ないことによる。この点では「あゆみ」が準備的な役割を果たすであろう。つぎに「地理学史」という先入観にとらわれるととまどいを感じるようになる。著者は重要な問題や概念にぶつかると随所で時代と学者を超越して縦横に論考を

展開する。したがっていわばテーマ中心の論述になっているわけで、最初のべた(2)タイプの著述であることを読者はつねに念頭におかねばならない。なおこの意味では現実の生態学なり著者の想定している「生態学」なりをまとめてやや詳しく解説する部分が必要だと思ふ。それは現在のところ「生態学」が一般的理解を獲得する必要性に迫られている段階にあると思われるからである。さらに欲をいえば著者自身の意図を含んだ索引があればとも思われる。ただしこれは著者だけの責任で解決できる問題ではないのではあるが。

つぎに「景観」に関する論考が意外にすくないことも残念である。しかし何よりも「潮流」の続編が一日も早く公にされることを期待する。そこではラツツェルやヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ以下現代地理学に直接する人達が歴史的パースペクティヴのもとに扱われるであろう。そこからわれわれは、さらに多くの示唆を与えられることになる筈だからである。さしあたっては著者編の『生態地理学』(朝倉書店刊)所収の論文などがその大綱を示しているのでそれによるほかはない。

六

ともあれ「あゆみ」と「潮流」とによってわれわれは地理学の発達のを広い視野から深く考察する展望台を与えられ、さらに地理学の方法の発展を歴史的に明示されたことになる。今後それらを用いて展開するかはわれわれに課せられた課題でもあらう。こうして両書はおよそ地理学に関心をもち地理学の本質論・方法論の問題にすこしでもふれようとする者が必ず立帰って読まなければならない基本文献の一つだと言って言い過ぎではないであらう。そ

して二〇世紀の一つの傾向として地理学が世界各国で盛んに研究され、学界は一つのものとなって来ている。したがって地理学史の研究は比較地理学史とでもいうべきものに高められる必要が生じている。著者はすでに両書でその骨格を暗示しているのではなからうか。生態学的傾向については今日の諸研究が日々に著者の展望を実証していくつつあるというべきであらうか。

*

*

著者の労作に改めて敬意を表するとともに明示ないしは暗示され

た視界をわずかにのぞき見た程度に終り、著者の意を十分に汲み得なかつた点の多いであらうことをおわびする次第である。

(地理学のあゆみ A 4 判一六五頁 図版五九 年表一二 索引
三二頁 昭和三七年四月 古今書院刊 定価六八〇円 近代地理学
の潮流 A 4 判二一八頁 文献表二〇頁 昭和三八年四月 大明堂
刊 定価五八〇円)

(大阪学芸大学教授)